寄稿

長崎ランタンフェスティバルの誕生と成長

100年の歴史と伝統を創れるか

長崎ランタンフェスティバル企画幹事会
幹事長　林（はやし）　敏幸（としゆき）

1946年　長崎市新地町に生まれる
1990年　長崎商工会議所青年部会長
2005年　国土交通省観光カリスマ百選認定
2006年　長崎県観光マイスター就任
現在、会樂園（中華料理店）支配人

新地中華街の歴史

新地中華街はもともと、1702年に出島と同じく海を埋め立てた「新地唐人荷物蔵」であった。

1868年に唐人屋敷がなくなると、「中国人貸地規則書」に基づき中国人居留地として中国人が生活するようになった。主に貿易商が多かったが、「旅日三刀」といわれるハサミ、カミソリ、包丁を使う洋服屋、床屋、料理屋が商売を営んでいた。最初は中国人同士の商売であったが、年月が経つにつれ長崎市民や街に同化していった。料理屋の商売も日本人客が中心で、40－50年前までは結婚式の披露宴の70%は中華料理屋さんで行っていた程である。そういう事もあり新地町全体は、現在の様ないかにも中国といった色彩や雰囲気はなく、中華街と呼ぶには程遠いものであった。

街づくりが始まったのは1981年（昭和56年）頃、会楽園店主・林照雄（長崎新地中華街商店街振興組合初代理事長）が牌楼門（ぱいろうもん）（中華門）の建設に意欲を燃やしたことから始まる。面白い逸話が残っている。門を造る数年前、店（会楽園）の前で友人と立ち話をしていたら、一目で観光客と判る人から『中華街はどちらの方向ですか？』と尋ねられた。その言葉がショックでずっと頭から離れなかったそうである。

実現にはいろいろな規制や制約があり大変なものであったが、時間をかけて84年（昭和

牌楼門落成時の垂れ幕

59年）に組合を設立し、86年（昭和61年）には待望の中華門を完成させたのである。

春節祭の誕生

翌年一周年を記念して開催したのが、ランタンフェスティバルの前身の「春節祭」であった。開催にあたり組合員で話し合いを行ったが、以前から年配の市民から「新地では旧正月は何もしないのですか」と聞かれることがあった。華僑の間では個人の家庭では祭壇を作り新年のお祝いをしている所もあったが、私の家庭では特に何かしていたという記憶がなかった。もちろん父が健在だった頃はいつもよりご馳走が出ていた気がするが、地域でお祝いすることはなかったので中華街のイベントとして始めようということになったのである。私が参加したのは、それまで長崎青年会議所に所属し主にイベントを手がけてきたので、その経験が生かされれば少しでも理事長である兄の手助けになるのではと考えたからである。

最初はほんとうに小さな小さな商店街のイベントであった。装飾はビニールのランタンを300個程飾っただけだった。イベントは若い華僑で作ったグループである僑友会が演ずる中国獅子舞だけで、後はちゃんぽんの早食い競争、華僑のチャイナ服姿のお嬢さんとのピクチャーサービス、中国粥の無料サービスなど素朴なものであった。

ちゃんぽん早食い競争の様子

しかし、中華街と自治会青年部のメンバーは来場のお客様に少しでも喜んでいただこうと一生懸命だった。それは私達にとっては初のイベントだったし、しかも中国の風習・習慣や文化を継承していくことなので非常な喜びでもあった。

今思うと一番祭りを楽しんだのは、お客様ではなく自分達自身だったような気がする。

中華街の結束と自信

1990年（平成２年）、長崎県では「旅博覧会」が開催されたが、中華街は「異国中国のゾーン」として指定を受けた。ランタン装飾範囲を拡大し数も密度も少し濃いものになったが、なんといっても期間中に三回行ったイベントである。当時テレビ、映画でラストエンペラーが大ヒットしていたので、それをアレンジして創作した皇帝皇后の結婚式を再現しようと考えて「中華大婚礼」を行った。結婚を予定しているカップルを全国に公募して、20数組の中から３組の新郎新婦を選んだ。もちろん両親や親戚の方々の出席が可能な方々で、すべて中国の衣装を着ていただくことが条件であった。

しかし準備は予想していたより大変なもので、清朝時代に時を設定してたくさんの文献を参考にして、新郎新婦を乗せる御輿や衣装その他の備品、100名以上のパレード参加者の募集など、さまざまな困難な準備が待っていた。

たまたま私自身が店舗の全面改装、商工会議所青年部の会長、異国中国のゾーンの実行委員長を同時にやっており、ただでさえ忙しかったが逆にそれをフルに活用し、店の石材や調度品を中国に仕入れに行く機会にパレードの服や備品の注文や検品に行くなどした。

主に中国福建省福州市に行ったが、中華門を建設していただいた方々が親身になって協力してくださり本当に助かった。また100名を超すパレードの参加者は商工会議所青年部、長崎青年会議所、長崎青年協会などの団体に協力を要請し、多くの方々に出演いただいた。

「中華大婚礼」は、新郎新婦を乗せた御輿を担ぎ楽器隊やお供の人々を従えてパレード隊がまず崇福寺を出発してアーケード商店街などを練り歩き、湊公園に到着、そこで中国式の結婚式を挙行、仲人は中国総領事館の総領事にお願いし、来賓代表挨拶は長崎市長だった。もちろん両親や親族の方々も列席し、すべて中国の清朝の頃の衣装を身に着けていただいた。その後主会場の松ヶ枝埠頭まで進む。そこで実行委員会の歓迎セレモニーを行い、いよいよ新婚旅行へ旅発ちである。目的地は伊王島の旧ルネッサンス伊王島。中国の復元帆船「飛帆（ふえいふあん）」に新郎新婦、親族やスタッフ100名を乗せ航海し島に着く。島では町長始め多

「中華大婚礼」をアレンジした現在の皇帝パレード

くの町民の方々が出迎えてくださり感動した。その後改装されたばかりのルネッサンス伊王島の大ホールで本格的な披露宴を行う。新郎新婦はそのままスイートルームに宿泊いただいた。

スタッフは後片付けをし、衣装や備品を長崎まで持ち帰る。長崎でもパレード参加者の慰労会を行い、そこでも片付けを行い次のイベントに備える。三回のイベントが終わり長崎に残ったスタッフが伊王島に駆けつけ、ささやかな慰労会を行った。スタッフ全員の顔を見ると感情が高ぶり、挨拶できる状態ではなくなったので、組合の副理事長の劉さんに頼んだが、すぐに涙声になりそれにつられて全員が抱き合ったりして、泣き出してしまった。イベントは大成功に終わり、高い評価を頂いた。私がなぜこのイベントのことを長々と書いたかというと、このことこそが今のランタンフェスティバルの原点にもなっているからである。新地町は市の中心にありながら「長崎くんち」の踊り町ではない。それは後々造られた町だからであろう。だから新地の青年にとって踊り町にはずっと憧れをもっていた。しかし内容は別にしてイベントを成し遂げた

満足感は大きな喜びと自信を持ち、何事もみんなで力を合わせて頑張れば何でもできると学び、体験することが出来たからである。

長崎市からのお誘い

1991年（平成３年）に湊公園が中国風の公園としてリニューアルされた。そこで春節祭をもっと発展させるべく、市にお願いして92年（平成４年）から湊公園を借りて開催したのだが、最初はあまりに広すぎて、どう活用していいわからない程で、公園の三分の一位しか使用しなかった。この年から子供達に中国衣装を着せドラや太鼓を鳴らし、アーケード街をパレードし、春節祭をご一緒に楽しみましょうと宣伝を始めた。内容は今思うとまだまだ充実したものではなかったが、スタートして６回目の93年（平成５年）には見物人も少しずつ増えていった。

その年の春節祭が終わってすぐに、市役所と観光協会の方が中華街を訪ねて来られ、中華街で開催している春節祭を一緒に拡大発展させていきませんか、とのお誘いがあった。

美しいランタンに大勢の人で賑わう新地中華街

それには私も関わった意味があった。長崎の観光客がこの二年ほど激減していたのである。ひとつの理由は旅博覧会の反動で、もうひとつは92年（平成４年）に開業したハウステンボスにあった。ハウステンボスの開業にあたっては長崎県に素晴らしいテーマパークができるということで、佐世保はもちろんのこと県下あげて支援をし、その相乗効果に期待をしていたが、長崎市にとってはそうはうまくいかなかった。ふたを開けるとハウステンボスの一人勝ちになってしまったのである。

もともと長崎の観光客の動きは２泊３日で旅行するとした場合、長崎で１泊、そして他の温泉か離島で１泊というパターンが一般的であった。それがほとんどハウステンボスで１泊し、後の１泊を他の観光地が取り合う形になったのである。宿泊客の減少は深刻になっていた。

そこで長崎商工会議所観光部会はこの危機を何とか打開するべく会議を持ち、青年部にその方策をまとめるよう指示があり、私がその会議の座長になり10名程のメンバーを募り徹底した討論をし、答申書を提出した。それが「光の街長崎」という提言書で、市役所に提出された。その提言書を受けた役所も同じ危機感を持っていろいろと方策を考えていて、それが「イルミネーション　イン長崎」というものであった。やはり民間も行政も考えることはそんなに違いはないと思った。宿泊客を増やすには夜の演出をして泊まっていただこうということになる。市はさっそくアクションを起こし、1,000万円の予算を組んだの

だが、さて何をしていいのかわからない。そんな時役所内である職員が「中華街で寒い二月頃赤いちょうちんを下げて祭りをやっているみたいですよ」と言ったそうだ。

中華街では市からのお話を受けてすぐに話し合いを持ったが、大方の意見は反対であった。それには大きく二つの意見があった。一つは役所の人達と我々民間人が、一緒に祭りをうまくやっていけるだろうか、という意見。もう一つは、一緒にやったとして我々華僑が風習、文化の継承として始めた祭りの意義が薄れていって、ただのちょうちん祭りになってしまうのではないか、という不安であった。しかしせっかくお誘いいただいたのに無碍にお断りすることもできないので、組合や自治会の会合の時役所の担当者に来ていただき、話し合いの場を何度か持った。話し合いをするうちに少しずつ打ち解けてきて、あちこちで酒を酌み交わしながら白熱した議論が交わされるようになり、そろそろ結論を出そうと意見を聞いたら、ほとんどのメンバーから出た言葉は「役所の人達も我々も長崎を思う気持ちは一緒だ」ということでお話を進めることに決定した。それはもう春を過ぎようとしていた。

具体的な話に入ったが、私達には正直な所1,000万円の予算が魅力的であった。春節祭も６回を数え中華街だけでの資金の調達は大変だったからである。しかし市の方から返って来た言葉は、この予算は中華街さんに付けたのではなく、装飾範囲を拡大するために付けたので、中華街から銅座商店街、浜市アーケード、観光通りと装飾を広げてほしいという

浜市アーケードにも無数のランタンが飾られる

ものであった。

しかしそれだけの範囲を装飾するにはあまりにも予算が少なく、開催にこぎ着けるか不安があった。そこで商工会議所を巻き込んだらと思い、当時の観光協会の会長もされていた松田会頭の所へお話に伺った。すると二つ返事で「一緒にやりましょう、会議所で協賛金を募るのでお金のことは心配せず、実行委員会の設立の準備を進めなさい」と言っていただいた。

それから準備に入るのだが、また問題が生じてしまう。浜市商店街さんの所にプランの説明に伺ったのだが良い返事が貰えないのである。数人の私達世代の方々に話しを聞いて頂いたのだが、「自分達はそんなに反対ではないけど、街の長老達が反対している。理由は、なぜ浜市に赤いちょうちんをぶらさげなければならないのか。それに翌年のスケジュールの中にバレンタインデーが入っていたので、バレンタイン商戦を展開するのに赤いちょうちんが似合うと思いますか。この祭りは新地中華街で始めたのでどうぞ新地さんだけで、おやり下さい。」ということであった。

帰りながら考えたが、もし逆の立場だったら自分もそう答えたかもしれないと思った。それでも走り出したので何度か説明に伺った。何度目だっただろうか、今でも決して忘れないが、浜市さんのメンバー（亡くなった有川さん、タナカヤの田中さん、石丸文行堂の石丸さん、多津屋の松田さん、梅月堂の本田さん、亡くなった立野さん）がいらっしゃって、いろいろと話し合った後、「敏坊（私のニックネーム）がここまで一生懸命頑張っているのだから、一度付き合ってやろう。長老達は我々が説得するから心配するな」と言ってくれた。今述べた皆さんは青年会議所で一緒に活動した仲間なのである。このみんなの友情に、浜市の事務所を帰る時涙が溢れて止まらなかった。後に装飾範囲を徐々に拡大していく過程においても、他商店街や自治会に友人が居て親しくさせていただいていたことが、大きな力になったと思っている。

さて、いよいよ準備に入る訳だが、みんなで一つの誓いを立てた。「百年続く祭りにしよう」という言葉である。長崎には三百数十年続く「長崎くんち」という素晴らしい祭りがある。やるからにはそれをお手本に末永く続く祭りにしましょう、長崎は歴史の街、100年経って一人前、というのがみんなの気持ちであった。

春節祭からランタンフェスティバルへ

ネーミングはかなりの議論の結果「第一回長崎ランタンフェスティバル」とした。シン

第一回長崎ランタンフェスティバルのエントランス

ガポール、香港、台湾などが使用していたからである。そして春節祭は神戸、横浜の中華街でも行っていたのでそれと差別化したかったからでもある。

なんとかオープニングまで漕ぎ着けることができた。仕上がりは、そこそこのイメージが出来た気がするが、メイン会場の湊公園はまだ半分位しか使いきれないボリュームであった。

点灯式は浜市さんに敬意を表して、大丸前で行った。第一回は14日間の開催だった。曜日の関係や２週間は長すぎるとの意見が出たりもして、今のように春節から元宵節までの15日間と固定したのは1998年（平成10年）の５回目からである。

最初の運営は心配していた通り、中華街と役所のメンバーの間には何かよそよそしい空気が流れギクシャクしたものだった。お互い一生懸命やっているのだが、役所の人達とはやっぱり一緒にはできないというメンバーが現れてしまった。どうしたものか思案したが、消灯して中華街と役所のメンバーに会員の食堂に集まってもらい、話し合った。結果お互いが気を遣い、遠慮していて、意思の疎通が

はかれなかったとわかり、今後もっともっと話し合いましょう、ということになり距離が少しずつ縮まった。何でも良く話し合うことの重要性を改めて知らされた。

運命的なランタンとの出会い

1995年（平成７年）、県観光連盟の平井会長（当時）から台北のランタンフェスティバル視察のお誘いを受け、ご一緒させて頂いたのだが、行ってその規模を見てびっくりした。総統の点灯式に始まって、中国獅子舞が100頭ほど一斉に踊りだすのである。出店なども数え切れない程あり、その規模はわれわれの1,000倍はある様に思えた。

その人ごみの中、あるランタンオブジェに目が止まり釘付けになってしまった。それは福・禄・寿の神様を形どったもので、色彩、格好などいままで見たことがない素晴らしいものであった。すぐに台湾観光協会と取引していた貿易商の方にぜひ製作者を捜して会わせてほしいと頼み、面会した。それが現在も長崎のランタンを製作していただいてる、「林健児先生」である。先生は現在台湾のランタン製作の第一人者であるが、我々とは強い信頼関係で結ばれている。

この14年、毎年春にお互いのアイデアと意見を出し合い、５月頃には作品を決定し台北で契約を交わす。10月末には工場のある中国中山市に、工務店や電気屋さんと共に検品に行き、自分達自身で直接確かめ注文を付ける。この繰り返しが年月を経てランタンを進化させた。骨組みの針金の素材や溶接の仕方、水に強い布の選択、漏電防止のための配線のケーブルや防水ソケット、頑丈なランタンの台座の開発など、日本の優れた製品と技術をランタン製作者に提供して、どこよりも素晴らしいランタンを製作していただいている。また、最近の中国や台湾のランタンと、我々長崎が発注するランタンの違いが出てきた。中国や台湾では春節祭は自分達のお祝いとして行い、それを見て楽しむ人も中国人であるため、作品の内容や色使いが現代的になっている。例えばアニメのキャラクターだったり色はパープルカラーを多用している。一方長崎では日本生まれの華僑が行い、それを見る方々はほとんどが日本人であるため、内容や色使いは、あくまでも中国の古典的なもので表現している。祭り全体も長崎独特のものになってきているので、中国系の留学生や観光客は、自分達の国より中国らしいと驚いている。

お客様にとっては、美しいランタンを観賞する以外にイベントも楽しみの一つである。各会場では中国色豊かな演技を披露しているが、中国雑伎以外はすべて、長崎市民の方々

中国の古典的な色使いの美しいランタン

の出演である。また「中華大婚礼」をアレンジした「皇帝パレード」、長崎でしか意味がない「媽祖行列」は衣装や備品はすべて中国から調達し、出演者も長崎市民であるが、このイベントやパレードすべての企画運営をスタッフの方々で行っていることは本当に素晴らしいと自慢できるものである。

成功の要因

まず新地中華街、自治会の結束であろう。

次になんと言っても、民間と行政の関係がうまくいっていることである。私はスタートする時こういう話をした。役所の方々には、何でも遠慮なく話してほしい。民間のスタッフには、役所の人達だからといって高飛車に話をしないでほしい、同じ目的に向かって行動するのだから、いつも対等な立場で話合おう。しかし決して馴れ合いになることがないように、飲食はすべて割り勘にしよう。担当者が観光課を離れても、いつまでも友達でいようなど。すべてのスタッフがいつもそのことを頭に入れて行動しているので、16年経った今も強い絆で結ばれている。

スタートしてから３年目だっただろうか、元観光課の職員が尋ねて来た。現在、老人の福祉に関する課に居るのですが、今度イベントをやるので、その時の景品の協賛をしていただけないかという相談であった。すぐに中華街のメンバーに話したところ、「彼には我々と一緒になって、ほんとに頑張ってもらった、みんなで協力しよう」と景品を集めることになった。後日タクシーで受け取りに来た職員はその量の多さに驚き、すぐに役所の軽トラックを取りに戻って行った。

国の重要文化財である眼鏡橋の周囲にもランタンが輝く

ただ良いことばかりで、なんでもすんなりいくとは限らない。そもそも役所のやり方やシステムと我々民間のやり方は異なる場合が多く、意見が対立する事がたびたび起こる。お金の執行の仕方なども、行政と民間では違う。そんな時はやはり良く話し合うことだ。そしてどうしても意見が合わない時は、それでその目的をやめるのではなく、お互いが一歩か二歩ずつ下がりましょうと言っている。そうすれば目的に対して80%か60%しか出来ないかもしれないが、ゼロよりはましだろう、そして、終わったらまた残りの分は話しあいましょう、と。

この関係はこれから先も、ずっと付きまとうことだと思っている。それでもこの話し合いを根気よく続けなければ祭りが成り立たないだろう。この祭りは我々だけでも、行政だけでも、ここまで大きくし得なかったと思うし、これから先も続けていくことはできないと思っている。

次に長崎市民の協力である。祭りの期間中5,000人のボランティアが活動している。特に中央地区商店街や自治会の協力は欠かせないものである。元来長崎人は外部の者を拒まない、外国人であろうと快く受け入れた土地柄である。中華街と一般市民が一体となって祭りを盛り立てているのは、現在もそのDNAが受け継がれているのであろう。

最後に長崎と中国の歴史の古さと深さである。中華街の周りには、唐人屋敷、崇福寺、興福寺、眼鏡橋など中国にまつわる歴史的建造物があり、そのほとんどが国宝や重要文化財等で、これほどの地域は世界中のチャイナタウンを回っても例がない。そのような先人達が築いてくれた遺産の中で行われている祭りに、先人達が目に見えないパワーを与えてくれている気がしてならない。

今後の課題と展望

春節祭が始まって22回目を終えたが、全国で行われている有名な祭りに比べるとまだまだ日が浅く、若い祭りである。今のランタンフェスティバルのスケールと内容は、私の今頭に浮かべている理想の50%位だが、今後も年を重ねて少しずつ進化していけばいいと思っている。しかし先にも述べたように、小さな祭りからここまで大きくなり、今後の問題点や改善しなくてはならないことが多くあるのは確かである。

会場の広さの問題、交通問題、長崎の狭い道路でのお客様の安全の問題、駐車場の問題、レストランや土産品店、宿泊施設などの受け入れ態勢が十分か、また期間中のボランティア、警備員や警察官の動員数も充分足りているのかなど、数えたらきりがない。

それぞれを、いかに100%に近づけていくか、祭りに携わる人達と今後知恵を出し合って、前進していきたいと思う。

もうひとつ、どうしても解決しなければならないのが、ランタンやその機材の格納庫の問題である。現在民間の倉庫や小学校の空き教室、市役所の施設の空き室、華僑会館など数ヶ所に分散して格納しているが、数量がどんどん多くなり、もうパンク状態である。このままでは賃料や管理の問題が大きくなっていくので、どうしても専用の格納庫が必要と考える。しかしそれには土地や建物の建設など、多くの課題をクリアしなくてはならないが、この祭りを続けて発展させて行くためには必ず解決しなければならない問題であると思う。

動員数が100万人に手が届くところまで来ているが、私たちは高望みせず、またその年に発表された数字に一喜一憂せず、確実に前

メイン会場の湊公園の様子

年をクリアする内容に向けて頑張っていけば、おのずと達成できるものと確信している。これまでもそうだったように、自分達と市民の皆さんに愛され、それを長崎まで見に来てくれる観光客に楽しんでいただける祭りにしたい。

田上市長は「長崎ランタンフェスティバルはただのイベントではない、年中行事である。年中行事には終わりがない。」と言われた。私達スタッフも同様の考えで祭りに携わっている。長崎はお正月が二回ある、と市民が自慢できるようにしていきたい。

スタートした時小学生だったスタッフの子供達が、今は祭りを手伝っている。後継者のことをよく聞かれるが、毎年繰り返し一緒になって頑張り、身を持って体験していけば、必ず継承していってくれるものと信じている。私自身、いつまでこの祭りに携わっていけるかわからないが、人生において、大きな出会いができたことには間違いない。

祭りを始めた頃、父の故郷を初めて訪ねた。その時こんな田舎から海を渡り、長崎の地で商売を起こし、苦労したであろう父の凄さに人生観が変わった。私がそれまでやってきたことが、父の苦労に比べると、あまりにも小さいことだと思い知らされた。それがこの祭りに全身全霊打ち込めた大きな要因である。そしていつか、あの世から「お前達やるじゃないか」と親父の誉め言葉が聞こえるまで、初心を忘れず頑張っていきたいと心に誓っている。祭りをスタートさせる時、「百年続く祭りにしよう」、と誓った言葉をいつも忘れずに、子や孫に継承していきたい。

今年のメインオブジェの前で記念撮影

長崎ランタンフェスティバルの歴史

開催年	名称		開催期間	開催日数	集客数	経済波及効果
1987年（昭和62年）	第１回	春節祭				
1988年（昭和63年）	第２回					
1989年（平成元年）			（昭和天皇崩御のため開催を中止）			
1990年（平成２年）	第３回					
1991年（平成３年）	第４回					
1992年（平成４年）	第５回			３日間		
1993年（平成５年）	第６回			３日間		
1994年（平成６年）	第１回	長崎ランタンフェスティバル	２／１～２／14	14日間	15万人	－
1995年（平成７年）	第２回		１／28～２／12	16日間	25万人	－
1996年（平成８年）	第３回		２／16～２／25	10日間	33万人	－
1997年（平成９年）	第４回		２／７～２／16	10日間	41万人	－
1998年（平成10年）	第５回		１／28～２／11	15日間	56.5万人	－
1999年（平成11年）	第６回		２／16～３／２	15日間	62万人	－
2000年（平成12年）	第７回		２／15～２／19	15日間	69万人	63億円
2001年（平成13年）	第８回		１／24～２／７	15日間	64万人	69億円
2002年（平成14年）	第９回		２／12～２／26	15日間	74万人	104億円
2003年（平成15年）	第10回		２／１～２／15	15日間	80万人	113億円
2004年（平成16年）	第11回		１／22～２／５	15日間	68万人	75億円
2005年（平成17年）	第12回		２／９～２／23	15日間	82万人	99億円
2006年（平成18年）	第13回		１／29～２／12	15日間	86万人	96億円
2007年（平成19年）	第14回		２／18～３／４	15日間	92万人	90億円
2008年（平成20年）	第15回		２／７～２／21	15日間	91万人	93億円
2009年（平成21年）	第16回		１／26～２／９	15日間	80万人	－